

「こんな錠の二ツや二ツ。」

「一ツや二ツ……。そんなら去年三番藏の錠を捻ぢ切つたのはお前と違ふか。」

「イーエ減相もない。」

「イヤ、これは冗談や、開けとくれ」

「ヘイ。」

「着類は相當に持つてるなア。」

「ヘエ、かなり着物は持つて居ります。」

「お前、此の上の着物に見覺へあるか。」

「ヘエ、これは此間お寺詣りのお供に着て参りました様に思ふて居ります。」

「ア、そうかこの帯は……。」

「やはり、其時締めて行た様に思ふて居ります。」

「そうか、此の着物は見覺えあるか。」

「こら、目見得の時に着て來た着物で。」

「そんならこれは。」

「ア、旦那さん、この着物はお鍋が自慢の着物で、あれの母親が手織で織つたと云ふ、強い事にか

けたらこの上ないといふ、雨ははじく、鐵砲除ける、大砲除ける、地雷火除ける。」

「コレ、そんな着物が有るかいな。」

せんぐりく／＼出しまして、下から二枚目の着物を出さうとすると、ブンと臭氣がいたします。

「これ番頭どん、妙な臭氣がするな……。」

「ほんに怪ツ體な臭氣が致しますなア」

「こゝまで調べたが、もう廢こか」

「それはいきまへん、これまで調べて、あと調べなんだから佛を造つて眼まなこを入れんも同じ事で、どうぞあとをお調べ遊ばせ」

「そんなら調べよう。」

と下から二枚目の着物を取りますと、下には白い毛や黒い毛が血だらけになつて、もやもや。

「フアア——」

「モシ旦那さん、指を挟まれて居るのに、蓋をばしめて、どうしなはる。それ見なはれ指が一本足らぬ様になりました。ヒイ、フウ、ミイ、ヨウ、イツ、ムウ、ナ、ヤア、コ、ノツ、それ見なはれ十本有つた指が九本になりました。この親指と、人指し指の間が廣い、こゝにもう一本有たんだすがな。」